

新聞報道に見る明治20年代の立山登山について

水谷 秀樹

Tateyama mountain climbing of the Meiji 20s to look
for a newspaper report

Hideki MIZUTANI

E-mail: mizutani@edu.u-toyama.ac.jp

キーワード：新聞報道, 明治20年代, 立山登山

keywords: a newspaper article, the Meiji 20s, Tateyama mountain climbing

I. はじめに

明治27年に志賀重昂が著した『日本風景論』は、日本に近代登山の精神を喚起する狼煙として位置づけられ、国内に登山ブームを湧き起こすきっかけになったと言われている¹⁾。

その後、明治30年代に入ると、湧き起こった登山ブームによって、「日本山岳会」が誕生（明治38年）し、同会は、以下のような登山活動を研究し、その成果を普及させる拠点としての役割を果たしていくことになる²⁾。

（略）山岳を宗教から解放し近代精神によって接しようとする立場と多様な活動を宣明した。小島³⁾（注記：引用者）によれば、＜山を見るを好み、山を登るを嗜み、山に関する文章を読むを愛す＞＜山好きが寄り合った＞組織の誕生である

このような、日本山岳会の活動は、同会の会員たちによって開催される「山岳会大会」⁴⁾や、日本山岳会の機関誌『山岳』において積極的に紹介され、普及していった。

さらに、明治30年代には、登山の普及に新聞社が関わってくる。彼らは、登山の魅力を伝える連載記事の掲載や、登山に関する様々なイベントを主催していった⁵⁾。

そこで本研究は、登山ブームが湧き起こる以前の立山登山の様子について、当時の新聞記事を分析した研究が見当たらないことから、そこに焦点を当て、当時富山県内で発行されていた新聞紙上に、立山登山に関するどのような内容の記事が掲載されていた

のかを辿ってみることにした。なお、本研究では、新聞史料が確認できる明治20年代を中心に、当時登山の最盛期となっていた7月末から9月初旬までの記事を中心に取り上げた。

II. 『日本風景論』発刊以前の国内の登山状況

ここでは、本研究を進めるにあたり、『日本風景論』が発刊される以前の、すなわち、国内に登山ブームが湧き起こる以前の、立山を含めた国内の登山状況について、簡単にまとめておきたい。

当時は、ヨハンネス・デ・レーケ（土木技師）をはじめとして、多くの「お雇い外国人技師」たちが登山を楽しんでいたことが、その特徴の一つに上げられよう。

彼らの登山活動は、当時の日本人のそれとは趣を異にしていたようである。それは、彼らが、国内の山を宗教・信仰、あるいは仕事と結びつけて登山していたわけではなく、彼ら自身の休暇や趣味として、登山そのものを楽しんでいたことにある⁶⁾。そんな彼らの登山活動を高瀬は、「（略）当時のお雇い外国人の多くの人びとは、七月から八月にかけての夏の休暇を利用して未知の国日本の地方を旅行することを一つの楽しみとしていたらしい。しかも未知の国の山峡深くわけ入って、秘境をさぐり、高山の頂をきわめることは、大きな魅力であったようである」⁷⁾と指摘している。

立山について見ると、明治10年以前にはガラウンドとディロンが、明治11年7月にはアーネスト・サトウと退役軍人士官のハウスらが、夏期休暇として立山登山を試みたという記録も残されている⁸⁾。

このことから、立山はすでに明治期の早い段階（明治10年代）から、外国人によって、休暇・旅行といった目的のもと登山されていたことが窺えよう。

一方、この頃の日本人の登山活動は、内務省、農商務省、陸軍省関係の技師たちの地図測量を目的とした登山や、大塚専一（農商務省地質調査所）に代表されるような地質学者たちの調査・研究を目的とした登山が中心であった⁹⁾。

このような日本人の登山活動は、明治20年代に入ると、少しずつ変化してくる。安川によれば、それは以下のような状況であった：¹⁰⁾

この時代（明治20年代：引用者）には年ごとに趣味登山、あるいは採集登山といった旅行が学生層（下線引用者、以下同じ）からおこなわれはじめており、夏休みなど相当の記録があったものと推定される。たとえば、富士山、御岳、立山、白山、乗鞍といった登拝で開山された山々には講中登山としてではなしの趣味登山がおこなわれはじめた。

このことから、明治20年代に入ると、それは学生といったごく限られた人たちになるが、夏期休暇や趣味といった目的を持った人たちによって、登山（立山登山）が楽しめるようになってきたということが解る。

Ⅲ. まとめ－新聞報道に見る明治20年代の立山登山の様子－

それでは、明治20年代の立山登山の様子は、どのような状況であったのだろうか。

このことについて本研究は、富山県立図書館に所蔵¹¹⁾されている中越新聞、富山日報、北陸政論の紙面から、山開き期間中¹²⁾を中心に、記事の内容を確認した（【資料－1】参照）。

その結果は、以下のようにまとめられよう。

①山開き期間中に掲載された記事の内容は、大きく3点にまとめられそうである。

それは、1. 山開きに関すること、2. 奉幣使¹³⁾に関すること、3. 明治20年代に頻発した洪水や豪雨による被害から、不通となっていた登山道や山小屋の修理が完了し、登山が可能になったことを伝える広告記事の3点である。

この他には、以下のような内容の記事が掲載され

ていたことが確認できた。

②学生の登山について

明治22年の富山日報紙上において、石川県の師範学校生徒による登山の様子が報じられている。しかし、学生の立山登山に関する記事は、この時期これだけであり、地元である富山県内の学校登山に関する記事となると、それは確認できなかった。

③外国人の登山について

明治24年の、北陸政論紙上に掲載されたヨハネス・デ・レーケ氏の立山登山に関する記事からは、彼が夏期休暇や趣味として立山登山を実施したことは確認できない。

④『北陸政論 明治25年8月10日（水）付』の記事は、当時の立山に県外（岐阜、愛知）からの登山者が訪れていたことを報じている。

⑤立山開山千二百年祭に関すること（北陸政論、明治25年8月）や、中語（現在の立山ガイド）に関する（富山日報、明治29年）記事が掲載されている。

⑥立山登山の魅力などを伝える連載記事といった内容のものは確認できなかった。

【注及び引用・参考文献】

1) 布川欣一編：『目で見ると日本登山史』、山と溪谷社、p68、2005年11月10日

なお、志賀重昂の略歴は以下のとおりである。

「1863～1927。札幌農学校（北海道大学の前身）卒。明治21年、評論家・三宅雪嶺らと政教社を結成。雑誌『日本人』を創刊。のち代表作『日本風景論』によって、日本山岳会の結成を一段と早めたとして、明治44年、同会名誉会員となった。」

2) 布川欣一編：同上書、p75

3) 小島烏水：1873～1948。本名は久太。志賀重昂の『日本風景論』によって登山に目覚め、(略)岡野金治郎とともに山行を重ね、日本山岳会設立の中心となって働いた。(布川欣一編：『目で見ると日本登山史』、山と溪谷社、p73、2005年11月10日)

4) 山岳会大会の概要については、拙稿『明治期の「山岳会大会」について』、富山大学人間発達科学部第7巻第1号、平成24年10月、pp139-144を参照されたい。

5) 新聞社と登山の関係については、以下拙稿を参

照されたい。

1. 『明治後期における女性の立山登山と富山日報社の関係』
富山大学教育学部紀要 A（文化系）第52号，
平成10年2月，pp11-22
2. 『明治30年代の立山登山に関する研究
～当時のマスメディア（新聞・出版）との関
係を中心にして～』
北陸体育学会紀要，第42号，平成18年3月，
pp9-18
3. 『明治40年代の富山県における登山の普及に
関する研究－新聞社（富山日報社・高岡新報
社）の果たした役割について－』
北陸体育学会紀要，第43号，平成19年3月，
pp9-19
- 6) 遠藤甲太他：『日本登山史年表』，山と溪谷社，
pp 8-9，2005年11月10日
- 7) 高瀬重雄著：高瀬重雄文化史論集1
『立山信仰の歴史と文化』，名著出版，昭和56
年3月3日，p372
- 8) 高瀬重雄著：同上書，pp366-376
- 9) 安川茂雄著：『近代日本登山史』，あかね書房，
昭和44年6月30日，p133
- 10) 安川茂雄著：同上書，pp65-66
- 11) 三紙の所蔵状況は以下のとおりである。

【中越新聞】

明治18年10月～12月（1月～9月欠号）

明治19年1月～6月（7月～12月欠号）

明治20年2月～12月（1月欠号）

明治21年1月～7月

【富山日報】（明治21年7月25日，中越新聞から

改題）

明治21年7月（8月～12月欠号）

明治22年7月～12月（1月～6月欠号）

明治24年1月～7月（8月～12月欠号）

（明治25年1月～明治27年12月欠号）

明治28年1月～12月

明治29年1月～12月

【北陸政論】（明治23年9月14日，北陸公論から
改題）

・（明治20年1月～明治21年12月欠号）

・明治22年1月～3月（4月～12月欠号）

・明治23年9月～12月（1月～8月欠号）

・明治24年1月～12月

・明治25年4月～8月，10月～11月

（1月～3月，9月，12月欠号）

・明治26年1月～2月，4月～6月，8月～12月

（3月，7月欠号）

・明治27年1月，3月～12月（2月欠号）

・（明治28年1月～12月欠号）

・明治29年2月～9月，12月

（1月，10月～11月欠号）

12) この頃は，7月25日前後から9月5日頃まで
の期間を立山参詣期と位置づけていた。

13) 奉幣使について『富山県[立山博物館]常設展示
総合解説』には次のように解説されている：

「1883（明治17）年から県知事が奉幣使として立
山に登り，山頂の峰本社に参拝し，幣帛を献納し
て国の鎮めと国民の幸福，県民の無事息災を祈る
ようになったのである。」（富山県[立山博物館]
編：『富山県[立山博物館]常設展示総合解説』，
富山県[立山博物館]，1991年11月1日，p79）

（2016年10月19日受付）

（2016年12月7日受理）

【資料－1】注1)

中 越 新 聞	
1. 1887（明治20）年7月22日（金）	雑報「立山に登る」
尾越上新川郡長には寺本全郡書記長を随へ郡内巡回の序に明廿三日立山雄山神社へ参詣さるゝよ志	
2. 1887（明治20）年7月30日（土）	雑報「立山詣で」
富山県教習巡查一同を全所監督警部補池部源太郎が引率し大運動として彼の峻嶺高嶽なる立山へ来る三十一日攀登する筈よて其往復日数は凡そ一週間許りの見込なりと	
3. 1887（明治20）年8月8日（月）	雑報「立山詣で」

<p>客月廿五日山開きせしより以来晴天打続き日々登山するものは千人内外にて近年なきことなり為めに岩峯、芦峯寺の両村にて宿屋は差支へ又た室堂は充満して堂外は露宿さへするも乃あるよし斯る参詣人乃多きは昨年虎列刺病の流行せしにより本年に繰延したると此頃氣候乃適順なるとによると云う</p>
<p style="text-align: center;">富 山 日 報 (1888 (明治21) 年 7 月 25 日 「中越新聞」から「富山日報」と改題)</p>
<p>4. 1889 (明治22) 年 8 月 22 日 生徒の遠足運動</p> <p>石川県尋常師範学校教頭堀義太郎氏以下教員五名、生徒八十名は遠足運動として本県上新川郡立山雄山神社へ参詣旁々登山の途次昨廿一日正午来富し本県尋常師範学校及び全中学校内を縦覧し旅籠町旅人宿某方に一泊し今朝早々発途せり</p>
<p style="text-align: center;">北 陸 政 論</p>
<p>5. 1891 (明治24) 年 8 月 6 日 (木) 広告</p> <p>去月常願寺大洪水に付立山参詣道路の危難に疑惑を生し途に付難き旨聞受候信者も有之よし更に通路には異状無之且藤橋も架設出来候此段信徒諸君へ広告す 明治廿四年八月四日 立山室所</p>
<p>6. 1891 (明治24) 年 8 月 14 日 (金) 広告 注2)</p>
<p>7. 1891 (明治24) 年 8 月 16 日 デレーケ氏</p> <p>目下立山に登山中なる内務省雇技師デレーケ氏は凡そ一週日の予定にて各所を視察するを以て来る十九日頃ならては帰富せざるべしという</p>
<p>8. 1891 (明治24) 年 8 月 19 日 (水) デレーケ氏等帰る</p> <p>豫て水源取調として立山へ登りたる内務省雇技師デレーケ氏及び増田参○官、岸県属、高田技師の一行は一昨夜帰富されたり</p>
<p>9. 1891 (明治24) 年 8 月 19 日 (水) デレーケ氏の出發</p> <p>内務省雇技師デレーケ氏は本日より高田技師と共に下新川郡黒部川を始め早月片貝の各川を実地取調として出張するよし」</p>
<p>10. 1891 (明治24) 年 8 月 19 日 (水) デレーケ氏の立山視察</p> <p>過日立山に登りたるデレーケ氏の一行が帰富したる○は別項にも記したるか今其常願寺、白岩、早月、黒部各川の水源に就き親しく実況を視察したりという話を聞くに常願寺川の水源字湯川の upstream なる柳原小谷より出枝原川、出原小谷川の両支流、松尾川の諸川の過般の出水の爲め兩岸盡く崩壊し立山の温泉まで凡そ四里計○川の兩岸五丈乃至七丈の山抜にて爲めに湯川に土砂を流し従来より○二丈以上の高所に川流○るに至れり又た温泉より更に流水に従て遡るに鼠谷川、ニクシ谷川、ニシタニ川各支流の兩岸凡そ三里計りは崩壊し更に舊知の見る處なし殊に○倉岳の崩壊所は所々より人家大の巨石を散見し若し此大石にして一朝墜落せば温泉まで顛墜○るを以て其危険は見るものをして思え○○に粟を生せしむるはかりなり又た更に上流鷲ヶ嶽の麓、苅込池真近きまで崩壊し其状況尤も凄しき事なるが川流○水して安政年度の如き惨況に見さりしなり云々とありしという</p>
<p>11. 1891 (明治24) 年 8 月 19 日 (水) デレーケ氏登山の順序</p> <p>先ず程を富山に起り最初常願寺川支流湯川の沿岸より登り又た温泉場より新湯までに至り夫より松尾、鯉鮒両嶽の間より室所に至り浄土立山別にて水源を撮影し再び温泉場より下山したりと</p>
<p>12. 1892 (明治25) 年 7 月 15 日 (金) 広告</p> <p>「立山温泉開湯広告」注3)</p>
<p>13. 1892 (明治25) 年 7 月 29 日 (金) 立山詣で</p> <p>此頃の天気にて例年の通りソロソロ立山詣が多くなりしと見え、一兩日前よりは壯年輩が続々紙旗を携えて旅行するを見受くるに至れり</p>
<p>14. 1892 (明治25) 年 8 月 7 日 (日) 広告</p> <p>「洪水無難広告 立山深見温泉主人 全番頭中」注4)</p>
<p>15. 1892 (明治25) 年 8 月 10 日 (水) 立山参詣者</p>

客月二十日より再昨日迄の立山参詣者は凡そ七千人にて中にも去る三日は登山者最も多く同夜芦峯寺村に宿泊したる人数は九百六十人と聞こえたり、又参詣者は岐阜、愛知の両県人及び下新川郡人多しといふか昨今の冷氣にて登山者は追々減少の様相なりとのこと
16. 1892 (明治25) 年 8 月16日 (火) 立山開山千二百年祭
来る二十日より一週間上新川郡芦峯○村廟所にて立山開山有頼卿千二百年祭を執行する由にて昨日立山教会長柗野安輝氏は同二十三日に富山県高等官の臨場を願い出てたりと又同祭典中は同地に於て芝居を興行し桜街の芸妓○数名は登山手踊りを奉納するとぞ
17. 1892 (明治25) 年 8 月18日 (木) 広告
本月二十日より一週間芦峯寺村祖霊社に於て立山開祖佐伯有頼卿千二百年祭執行候に付ては四方の信徒諸君より既に奉納せられたるに余興は左記日割取極候條此旨謹告す 立山開山祖霊社々務所 二十日、二十一日 近隣各村より獅子舞及山車 二十二日、二十三日 全上及富山桜木町有志者より芸妓手踊 二十四日 飛州高山有志者より煙火数十本 二十五日、二十六日 立山講中より芝居余興
18. 1892 (明治25) 年 8 月27日 (土)
本年は、立山開山以来千二百年に相当するを以て左に同山の縁起を掲げ以て読者の一○に供せん●(マ)立山雄山神社の縁起
19. 1893 (明治26) 年 7 月13日 (木) 立山の山開き
昨今の暑さに連れ例の年登山は追々好時節となりしを以て上新川郡立山にては来る二十五日当番の神官が室堂に出発して山開きの式を行うよし
20. 1893 (明治26) 年 7 月22日 (土) 雑報 奉幣使の登山
県社雄山神社例祭に付奉幣使富山県○熊野秀之輔は○古澤儀三郎氏と共に明日午前三時富山市を出発し、同夜は芦峯寺に一泊、廿四日は室所に一泊、廿五日は早天登山祭典を挙げる筈なりといふ
21. 1893 (明治26) 年 7 月 29日 (土) 雄山神社奉幣式
雄山神社奉幣使熊野秀之輔氏は属官堀澤儀平氏及び同行の土屋師範学校教諭原富山警察署警部佐伯付属小学校訓導其他中学生徒五名従僕数名と共に去廿三日出発常願寺川向かひに至れば岩峯寺村の神官数名正服にて出迎えを為し例によりて頂上迄護衛を為す五百石分署の巡査三名と共に岩峯寺村佐伯治豊氏方に休憩を為し進んで大麓芦峯寺村に至れば同村社に神楽を奏して遙かに奉幣使の登山を祝せしが一行は出迎の神官と共に佐伯馨氏方に入り同夜は同家に一泊し翌廿四日払曉藤橋、小金沢、材木坂、草生坂、ブナ坂、荊安坂、美女坂、桑谷を経て弥陀ヶ原に出て夫れより一の谷を超て室堂に着し夕景地獄谷を巡りて室堂に一泊し翌二十五日朝四時一行は神官護衛巡査等二十余名と共に先ず浄土山へ登り廻はりて一の越に出て同七時社前に至りしが神官佐伯敬治氏は神扉を開き神饌(帛、洗米、神酒、○、野菜、干魚)を供し後ち祝詞を奏して了りて奉幣使熊野秀之輔氏は神前に幣(下賜金十圓)を捧げ次に順次一行の参拜あり次に神饌を撤し奉幣使以下神酒を拝飲して下山直ちに帰路に就き乳母處より弥陀ヶ原に至り同原の追分という處より岐路に出て峻険を跋涉して立山の湯に至り両夜宿泊して一昨日帰廳せ○ものなりと
22. 1894 (明治27) 年 7 月12日 (木) 立山の山開き
立山の山開きは従来陰曆七月の一日を以て例となし来りしにより来る八月一日は此旧例に当たれども本年は例年に比し暑気を催はすこと早かりし故本月二十日より登山するものあるべしといふ
23. 1894 (明治27) 年 7 月24日 (火) 奉幣使の出発 注5)
24. 1894 (明治27) 年 7 月29日 (日) 今年の立山
本年は暑気強きため立山の雪は多分融解し途中室堂に到るまでは概して雪をふまさる程の有様にて登山の人は大に便利なるべしといふ
25. 1894 (明治27) 年 8 月 5日 (日) 予後備兵の立山参詣

<p>在富山県の予後備兵は何時の召集の令下るも知れざればとて此三四日前は立山に参詣し予て武勇の守護神と称する雄山神社の祭神手力雄尊に戦勝の懇請を籠むる輩頗る多く為めに一時は登山者の五分の一は兵士を以て充たす程なりしといふ</p>
<p>富 山 日 報 (1888 (明治21) 年 7 月 25 日 「中越新聞」から「富山日報」と改題)</p>
<p>26. 1895 (明治28) 年 7 月 1 日 広告 「立山温泉広告」注 6)</p>
<p>27. 1895 (明治28) 年 8 月 12 日 広告 注 7)</p>
<p>北 陸 政 論</p>
<p>28. 1895 (明治28) 年 8 月 14 日 (水) 立山社務所からの広告 今夏は雨 (「霖雨の為め」) によって信徒の登山が延期される</p>
<p>29. 1896 (明治29) 年 8 月 16 日 立山参詣 近頃連日の快晴を○ふて立山峰○る雄山神社へ参詣するもの頗る多日々百八九十名を算するが今四、五日経ふは漸次減少すべしとをり</p>
<p>30. 1896 (明治29) 年 7 月 25 日 広告 立山中語人夫近年参拝人に対し金銭を貪り危険を犯し時に不都合の議相聞へ候に付今回中語人夫規約相設け鑑札授与笠に二寸四方赤立の目印を付し岩嶺、芦嶺に中語事務所相開き候間参拝の輩同所取締人に就き中語雇入可有之候尤も同所に中語規約揭示中一定の賃銭の外一切出金せざる事此段立山参拝人に広告す但鑑札并笠目印無之中語人夫は登山する○を許さず 明治廿九年七月 立山雄山神社社務所</p>
<p>31. 1896 (明治29) 年 7 月 30 日 奉幣使の一行 立山雄山神社例祭の奉幣使として去る廿三日当地出発せし本県属小森作次郎、雇稲垣重賢の両氏は五百石警察署の護衛巡查二名と共に同日中新川郡芦嶺村に一泊し翌廿四日室堂に一泊し翌廿五日立山峰に於て祭典執行に付登山し終て同夜室堂に一泊し夫より立山温泉を経て廿七日帰序せりという</p>
<p>32. 1896 (明治29) 年 7 月 31 日 立山中語人の同盟規約 今度立山雄山神社社務所にては中語人夫同盟規約を設け登山の節は山内を案内し神社参拝の便宜を受授し危険の害を除き安全に来往せしむる趣旨にて中語雇料は一日四十銭とし若し其荷物目形四貫目以上に及ぶ時は雇料の外に五銭以上三十銭以内の報酬を受くる者と定め万事旧来の弊風を去り其事務所を立山村大字岩嶺寺村芦嶺寺村の二ヶ所に設けたり</p>
<p>33. 1896 (明治29) 年 8 月 3 日 広告 「立山参詣及び温泉通路人宿広告」注 8)</p>

注 1) 記事は年代順に記載し、印刷不鮮明により判読不可能な記事の文字は、○印で表した。

また、可能な限り書かれた記事の原文をそのままを転載した。

注 2) 記事は、この年の 7 月 19 日の大洪水により道路が破壊されたが、道路修復も済み「(略) 老弱男女小児に至るまで通行少しも指支無之候間旧に倍し賑々シク御光臨御入浴被 (略)」と多くの来場者を求めるといったことを報じている。

注 3) データベース化された紙面状態から文字の判読が容易ではないが、7 月の洪水により湯小屋、道路が破壊されたが復旧したことを報じている。

注 4) 洪水による被害を心配することなく入浴可能であることを報じている。

注 5) この年は、富山県属澤田保、小塚貞一の二名が奉幣使として立山に登山することを報じている。

注 6) 記事は、明治 28 年 6 月付で、「上新川郡利田村 立山温泉主人敬白」として①明治 27 年の洪水により立山温泉までの道路が崩壊したので、その復旧を春から取りかかった結果、復旧工事が完了したこと、②浴室、客室器具などを改良、清潔にしたことなどから多くの来場者を期待していることなどを報じている。

注 7) 記事は、明治 28 年 8 月付「立山社務所」から、この夏に立山参詣を予定している者に向けて、雨による登山道の危険は無いことを伝えている。特に参詣のためには主要な道路となる藤橋が「嚴重なる電信線を以て架設落成」したと報じている。

注 8) 記事は、「中新川郡立山村大字芦嶺寺村 宿屋営業者一同」として①浴室、客室器具などを改良、清潔にしたことなどから大人、子供問わず多くの来場者を希望していること、②「立山道路、温泉通路」を補修して心配なく通行できること、③中語人夫も斡旋することなどを報じている。